

仕事は自分から覚えてゆく

里草会顧問 福井正樹

野道を歩いていると、サツマイモを掘っているのに出会った。おじさんが三本鍬を深く打ち込んで力を入れると、土の中からもりもりとサツマイモが見えてくる。手で引っ張ると大小の芋が入っている。それを引き出して抱えて畑のそばの籠に運んで行くのだ。持ちあげかねるようになるように大きなのも土をかぶっていて、面白くて歓声をあげながら畑の中を走り回った。

何日かしてそのおじさんからサツマイモ掘りを手伝ってくれてありがたかったという話を祖父が聞いて、「よそのを掘るのなら家のを掘れ」と叱られた。あんな面白いことが家でもできるのかと期待していたのだが、サツマイモ掘りを家で楽しんだ記憶がない。仕事だといわれると面白くなかったのだろうか。

秋に伯母の家にお使いにやられて、今日は日暮れが早いからついた頃に日が暮れるだろう。今夜は月も出ないし帰るとすると提灯などが必要だ。明日学校が無いから泊めてもらって帰って来いと言われた。夕暮れに着くと従弟たちも歓迎してくれて、座敷に上がって休んどれという。みんなで菜種の定植をしていたがもうすぐ終わるというのだ。しばらく傍で見れていたが、少しづつ夕闇が迫ってくる。座敷で待てと言われたって、伯母のうちは村から離れた5軒ほどの集落でまだ電気が引かれていない。ランプなので私には明かりをつけることができない。明かりのない家に上がる気もしない。見ていると難しい仕事ではなさそうなので、従弟たちに要領を聞きながらナタネの定植を手伝った。畑の土を掘って苗を置き土をかければいい。終わりまで手伝って、みんなに喜ばれながらランプを点けて囲炉裏の座敷に上がる事ができた。

仲間で遊んでいて、夕方になり遊び疲れてそれぞれ帰ってしまった。私は祖母の働いている畑のそばに行き、祖母が仕事をやめるのを待っていた。早春の夕方暮れそうに見えてなかなか暗くならない。麦の青々と伸びてきた畝の草を削って、その削り落とした土を砕いて麦の畝にかけてゆく。つまり畝の草を土ごと削り落として草の根を切り、麦の根元に土を戻して畝を整えてゆくのである。

退屈しのぎに置いてあった鍬で畝を削ってみた。遊びだと思うからそんなに役にも立たないし責任もない。いい加減に鍬を扱っていると、通りかかったお婆さんが大げさに褒めてくれた。うちの子より小さいのにもう麦の草削りを手伝うなんて、なんと立派な子なんだろう。明らかにお世辞で過剰な褒め方をしていると分かっているが、まんざらでもない。豚も褒めれば木に登るとかで、おだてられていると思いつつ面はゆい感じで鍬を使っていた。村の大人たちはぐるになって子供の働きを評価し、あの子がしていたのだからお前もできると手伝いに誘い込んできたのだろう。

崩した土を砕いて畝に戻すのはできないが、草を土ごと削るのはできる。祖母が私の崩した土を鍬で掻き揚げて畝を整えてゆく。祖母が草を削る分がそれで助かる、お前がやってく

れただけ早く帰れるのだからありがたいという。祖母が帰らないとかまどの火も焚けないので夕食の準備もできない。そのうち小ぶりの鍬が置いてあって、できただけでいいからちよっとでも草削りしてくれと言われるようになった。鍬を使っているとやがて土を掻き揚げることもできるようになる。

畑仕事だけではなく、すべて手作業なので仕事の出来上がりは見ればよし悪しが一目でわかる。お嫁さんが来て初めて畑に出た時など、村の人はその出来具合を見て評価するし上手下手は村中伝わる。草を削ってそれを掻き揚げて畝を作るのは私でもできるようになるものの、一目見れば下手な鍬使いだと分かる。女の子は嫁いで野良仕事の人並みにできるようになるように結構うるさく親が仕込んでいたものだった。私の地方では鍬は右手で先を握って作業するが、この場合だと畝の右手の方向に進むことになる。ところがこの地方で女の子が作業しているのを見ると左先でも上手に作業する。聞いてみると鍬はどちらでも使えるように習ったというのだ。

祖母の稲刈りを見てその出来具合を叔父はとても感心していた。仕上がりがきれいなかでなく、機能的に完璧で次の仕事もはかどるように稲が置かれているのだ。

草を刈るのは左手の親指を下に向けてつかむが、稲は親指を上向きでつかみ、穂の高さを揃えて握り下を刈る。さらに同じように刈り取った一握りをわずかに交差させて置いてゆく。束ねる人がその交差部分を藁で縛り一束にする。この一束を稲架に掛けるのだが、すつと二つに分かれて掛けやすいようになっている。しかも稲の穂が束の中に巻き込まれていなくてひとまとまりになっている。

脱穀する時稲束に巻き込まれている稲穂はうまく籾が落とせない。時には束を広げて稲穂を出して指でしごき落とす。刈る時に落穂も作らず穂の高さもまとまっていれば最後まで扱いやすい。祖父は藁を打つ時など巻きこまれていた稲穂をちぎって傍のざるに放り込んでおき、たまると鶏に与えていた。刈った稲束ひとつ見れば、上手かへたかが評価できるものなのだ。

中学生になる頃は男の子ならひとり前として百姓仕事こなせるのが当たり前であった。天秤棒は肥桶やもっこなどをぶら下げて運ぶためのもので、端に掛けた時に滑り落ちないように出っ張りが設けてある。これを担いで桶の下肥をこぼさないように運べるようになるには腰や肩の使い方が難しい。息杖と言っていたと思うが、肩までの程度の長さの棒を使い、この棒を立てて天秤棒を載せて休む。歩く時はこの棒を天秤棒を担いでいない肩から天秤にてこととして支え、腰をふり膝を使い調子を取りながら歩く。

野良から刈り草を運んで帰ってくる時、子供の時は背中に縄で背負ってくる。大人になると大きな草の束を担って帰ってくる。この担い棒は天秤と違い先がとがっていて、草の束に差し込んで使う。時にはふた束つつ刺して担ってくることもある。このサスと呼んでいる担い棒を使うようになると、子供を卒業してひとり前に近づいた百姓となるのだ。

春の忙しいころに学校に近い子が牛を使って代掻きなどをしてから登校してくる子もいた。私はできないのでとても偉いと思った。